

心と言葉のグローバル英語文法

英語で認識・思考・表現するとは
どういうことか

SAMPLE

成瀬由紀雄

目次

はじめに	3
【要約】.....	3
1 章 英語の基本単位	5
【要約】.....	5
1. 語	6
2. 句	14
3. 節	16
2 章 名詞認識	17
【要約】.....	17
1. 英語の名詞認識の三層構造	17
2. 英語の数量認識	22

はじめに

【要約】

- 学校英文法だけをマスターしても英語の読み書きができるようにはならない。
- 英語をマスターするには英語での認識・思考・表現の方法を理解しなければならない。
- 「心と言葉のグローバル英語文法」は英語における世界認識・思考・表現を詳細に解明する。
- 目標は英語の世界を深く理解し、それを日本語のサブシステムとして使いこなすことにある。

☆☆☆

学校英文法だけをマスターしても英語の読み書きができるようにはならない

多くの人にとって「英文法」と聞いてまず思い浮かべるのは、おそらく「学校英文法」だろう。具体的には 5 文型や主語、動詞、関係代名詞、過去形、受動態といった文法項目のことであり、これらの文法項目を詳しく理解することが英語の文法を学ぶことだと一般的には考えられている。

しかしこの考え方は、日本人の英語の読み書き能力を高めるという観点からみれば正しくない。学校英文法だけを習得したからといって、それがそのまま私たちの英語の読み書き能力の向上に直接つながるわけではないからである。

実際のところ、学校英文法に非常に詳しくとも英文をまともに書けない英語学習者が非常に数多くいる。従来の学校英文法をマスターすることと英語の読み書きをマスターすることとはまったく別ものである。

英語をマスターするには英語での認識・思考・表現の方法を理解しなければならない

では英語を書くうえで文法学習は必要ないのかといえ、そんなことはない。私たちのような英語ノンネイティブが英語できちんとした文章を書こうとすれば英語の認識、思考、表現方法を理論のうえからもしっかりと理解しておかなければならない。

「心と言葉のグローバル英語文法」は英語における世界認識・思考・表現を詳細に解明する

従来の英文法は英語という言語をできるかぎり包括的かつ体系的に分析し解明することを研究の理念とし目標とするものである。分析手法についてはそれぞれの文法によって異なり最終的に構築された文法体系にも違いはあるものの、英語のひとつの言語体系と捉えてその解明を目指すという点では同じである。

「心と言葉のグローバル英語文法」は、そのような従来の英文法が持つ理念や目標を共有しない。「心と言葉のグローバル英語文法」が目指すのは、英語人の世界認識や思考がどのようなプロセスを経て英語という言語となって表現されるのかを日本語人の世界認識や思考および言語表現と対比させつつ詳細に解明することにある。

目標は英語の世界を深く理解し、それを日本語のサブシステムとして使いこなすことにある

「心と言葉のグローバル英語文法」が目指す具体的な目標は、日本人が日本人として英語の世界を深

く理解し、そのうえで英語を日本語のサブシステムとして使いこなすための最良のツールのひとつをつくりだすことである。

従来の英文法では英語という言葉の解明に重点を置きすぎたため、それを利用して日本人が日本人として英語を使いこなすとの観点がなおざりにされがちであった。そのため、英文法をいくら勉強しても英語を使えるようにはならないといった、ある意味では的外れな、だがある意味では正当な批判を受けることとなった。

「心と言葉のグローバル英語文法」は、こうした事態の解消を目指すものである。従来の英文法を否定するのではなく、その成果を踏まえたうえで、日本語人が日本語人として英語を使いこなすための新たなツールを提供する。

成瀬由紀雄

1 章 英語の基本単位

【要約】

- 英語の Part of Speech とは語の機能/用法の分類のことであって、語そのものの分類のことではない。それを明治の誰かが「品詞」と「誤訳」してしまった（「詞」は「語」そのものの指す）ため、ほとんどの日本人が「品詞」とは語そのものの分類のことだと思い込んでしまった（その背景には日本語の特性と英語の特性の本質的な違いがある）。そしてこの「誤訳」が日本人の英語の理解と運用を 100 年以上にもわたって阻害し続けている。
- 英語の語の機能/用法の広さは、それぞれの語によって異なる。ひとつの機能/用法（品詞）しか持たない語もあるが、多くは複数の機能/用法（品詞）を持っている。
- 名詞（noun）は、「もの」を表現する機能/用法である。センテンスのなかで主語、目的語、補語として機能する語が名詞である。「名詞が主語/目的語/補語になる」のではない。「主語/目的語/補語が名詞」である。また語のかたちや位置からも、その語が名詞かどうかを（ある程度だが）判別できる。
- 動詞（verb）は構文の必須要素である Predicate（述部）の中核となす機能を持ち、「こと」を表現する。名詞を修飾する語が形容詞である。副詞は動詞を修飾するだけでなく、形容詞、副詞、センテンス全体も修飾する。そ
- 前置詞とは、主に動詞の現在分詞形から派生して、意味的には空間的イメージ認知に特化し、用法としては前置詞用法のみに特化した「特殊」動詞のことである。前置詞には動詞と同様に他動詞方法と自動詞用法がある。前置詞句は分詞句と同じものとして理解すべきである。
- 接続詞（conjunction）は、センテンス要素の関係性を示す言語表現である。代名詞（pronoun）は名詞・名詞句の代わりに用いられる語のことである。「代名詞」は英語ではそれなりに意味のある概念であるが、日本語では意味のある概念ではない。
- 「句」（phrase）とは、特定の働きをする語の集合体(word group)のうち、内部に主部・述部の構造を持たない集合体のことをいう。句は、「機能」（主部句・述部句・就職部句）と「形態」（名詞句・前置詞句・分詞句）という 2 つの観点から分類することができる。重要なことは、「機能」による分類と「形態」による分類を決して混同しないことである。この 2 つの分類はまったく別の概念である。
- 特定の働きを受け持つ語群のうち、内部に主部・述部の構造を持っているものを「節」（clause）という。「句」は節のなかの主部・述部の一部が省略されたものである。「節」が兄貴分であり、「句」が弟分である。

☆☆☆

1. 語

英語の Part of Speech (「品詞」) とは、語の機能/用法の分類

「water の品詞は何か」とたずねられると、ほとんどの人が「名詞」と答えるに違いない。だが、これは間違った認識である。water イコール「名詞」ではない。

「名詞」という日本語は Noun という英語の翻訳語である。「名詞」は「品詞」のひとつとされている。「品詞」には「名詞」のほか「動詞」「形容詞」「副詞」「前置詞」などがあるとされている。では、その「品詞」とはなにか。「動詞」「形容詞」「副詞」「前置詞」とはなにか。

「品詞」という日本語は英語の Part of Speech の翻訳語である。明治時代に誰かがつくった訳語であるが、誤訳である。それも、後世に大きな負の影響を与えているという意味において、きわめて罪深い誤訳である。

Part of Speech の定義は次のとおりである。“The part of speech indicates how the word functions in meaning as well as grammatically within the sentence.” (Part of Speech とは、意味と文法の両面において、当該の語がセンテンスのなかでどのように機能するかを示すものである。)

ここから分かるように、英語の Part of Speech とは、それぞれの語が持っている機能/用法に関する分類のことである。「詞」(Word) そのものの分類なのではない。ゆえに英語の water は Noun であるだけではない。Verb (水をかける、水を飲む) としても用いることができるのである。つまり、water は noun の機能と verb の機能の両方を併せ持つ。このことは辞書をみればすぐにわかることである。

日本語の「品詞」とは、語の機能/用法の分類ではなく、語そのものの分類

ところが最初に述べたように、ほとんどの日本人は「water の品詞は何か」とたずねられると、「名詞」と答えるのである。なぜか。それは日本語での「品詞」とは、語の機能/用法のことではなく、語のそのものの分類のことだからである。そして語そのものの分類として日本語では「水」はあくまでも「名詞」という種類の語である。「水」が動詞機能も併せ持つ「水(みず)る」「水(みず)った」などとなることは決してない。この認識が私たち日本人の心に深く刻まれていることから、私たちは water=水、ゆえに「名詞」と、無意識のうちに認識してしまうのである。そしてこれが英文の理解や運用に対して深刻なマイナス要因となる。

文法用語の「誤訳」による日本人の英語理解の歪みは、Part of Speech=「品詞」、Noun=「名詞」、Verb=「動詞」だけに限らない。そのほかにも、Article=「冠詞」、Subject=「主語」、Vowel/Consonant=「母音/子音」などもまた日本人の英語の理解と運用を 100 年以上にもわたって阻害し続けている「誤訳」の例である。このように翻訳というのは本当に怖い作業なのである。

ただ、100 年以上にわたって用いられてきた Part of Speech=「品詞」、Noun=「名詞」、Verb=「動詞」といった訳語を、私(成瀬)の一存で別の訳語に変えるわけにはいかない。それは現実的ではない。したがって本書においても Part of Speech/Noun/Verb に対して品詞/名詞/動詞といった訳語を使うことにする。

英語の語が持つ機能/用法(品詞)の広さは、語によって異なる。

英語の語の機能/用法、すなわち「品詞」の広さは、それぞれの語によって異なる。the や at のように、ひ

とつの機能/用法（品詞）しか持たない語もあるが、多くは複数の機能/用法（品詞）を持っている。

たとえば、chair には名詞機能/用法以外に動詞機能/用法がある。walk にも動詞機能/用法と名詞機能/用法がある。man や desk といった名詞機能/用法しか持たないように見える語にも動詞機能/用法がある。round には形容詞機能/用法のほかに、動詞機能/用法も副詞機能/用法も名詞用機能/法も前置詞機能/用法もある。すなわち、ほぼすべての品詞をカバーするのである。

名詞

名詞（noun）は、「もの」を表現する機能/用法である。ここでいう「もの」とは、「机」「椅子」「雲」などという実際に存在する具象物のほかに、「正義」「悪」「愛」「学問」といった抽象的概念も含まれる。

主語、目的語、補語にあたる語が名詞

上に述べたように、名詞という決まった語があるのではない。時と場合に応じて、語が「名詞」として用いられると考えなければならない。

構文機能の観点からみれば、センテンスのなかで主語、目的語、補語として機能する語が名詞である¹。もう一度、確認しておく。「名詞が、主語/目的語/補語になる」のではない。「主語/目的語/補語が、名詞」なのである。「名詞が主語/目的語/補語になる」のではない。「主語/目的語/補語が名詞」である。

かたちや位置から名詞を見つける基準

ところで、語のかたちや位置から、その語が名詞かどうかを（ある程度だが）判別することができる。その基準としては、次のものが考えられる。

1. 「決定詞」直後に置かれた語は名詞

「決定詞」（determiner）とは、新しい文法において用いられている文法的な概念である。

具体的には、伝統文法の分類における冠詞（a, the）、指示代名詞（this, that, its, these, those）、代名詞の所有格（my, your, his, her, our, their, whose, which）、数量形容詞（both, all, any, some, either, no, neither, each, every, enough, few, little, several, many, much, more, most）、前置詞が「決定詞」にあたるものである。

決定詞の直後に置かれた語は、どんなかたちをしていても、それは名詞である。名詞の前に a, the, his, that, its, all, any, some などがつくのではない。これらの語の後につく語が名詞なのである。

決定詞自身は、かたちが決まっている。したがって、センテンスのなかで何が決定詞なのかは、一目でわかる。じつは、私たちが英文を読んでいるときには、語順と、この決定詞とを手掛かりにして、構文を読みとっているのである。

英語ネイティブは、生まれてからの長いあいだの英語運用を通じて、この構文読み取りの感覚を無意識に習得している。だが、英語ノンネイティブである私たちは、そうはいかない。この語順とこの決定詞とを手掛かりにした構文の読み能力を、私たちは意識的に習得していかなければならないのである。

1 補語は形容詞の場合もある。

2. 主語/目的語は名詞

主語/目的語は、たとえどんなかたちをしていても、名詞である。名詞が主語/目的語になるのではない。主語/目的語が名詞である。

3. 前置詞の直後に置かれた語は名詞

前置詞の直後に置かれた語は、たとえどんなかたちをしていても、名詞である。前置詞の後ろに置かれる語は、前置詞の目的語である。目的語であるから、2の「主語と目的語にあたる語は名詞」にしたがって、それは名詞である。

4. 語尾のかたちが-ness, -tion, -ityなどであれば、名詞の可能性が高い

語尾のかたちが-ness, -tion, -ity, ~ance (shyness, addition など)であれば、その語は、名詞である可能性が高い。ただし、witness や function といった例外もあるので、注意が必要である。

5. 語尾のかたちが-s, -esであれば、名詞の可能性はある

語尾のかたちが-s, -es (soups, churches など)であれば、名詞である可能性が高くなる。ただし、述語動詞でも現在形三人称単数が-s, -esの語尾のかたちをとるので、-s, -esのかたちだからといって、つねに名詞であるわけではない。

6. 大文字で始まる場合は名詞である

大文字ではじめるのは固有名詞としての表記の約束であるから、それは名詞である。

動詞

動詞 (verb) は構文の必須要素である Predicate (述部) の中核となす機能を持ち、「こと」を表現する。ここでいう「こと」には、「行為」(～をする)、「変化」(～になる)、「状態」(～である)などが含まれる。

形容詞

名詞を修飾する語が形容詞である。「形容詞が名詞を修飾する」のではない。「名詞を修飾する語が形容詞」なのである。

副詞

動詞を修飾する語が副詞である。ただ現実には、副詞は動詞を修飾だけでなく、形容詞、副詞、センテンス全体も修飾する。置かれる場所も、明確に決まっていない。そのため副詞は、「自由修飾語」(Free Modifier)とも呼ばれる。

語のかたちは決まっていない。-ly がつくと副詞のことが多いのは確かだが、語尾が-ly であっても形容詞のこともある。たとえば early においては、He rises early every morning.の early は副詞用法であるが、He is an early riser.の early は形容詞用法である。

副詞は品詞のごみ箱

ようするに、ほかの品詞に当てはまらなければ、それは副詞である。そのため、副詞のことを「品詞のごみ箱」と呼ぶ人もいるほどである。

前置詞という名の「特殊」動詞

前置詞には、従来の文法では指摘されていない非常に重要な事実がある。すなわち、前置詞とはじつは動詞の一種（派生形）である。

前置詞の「前置」とは「目的語」の前に置かれるという意味である。だが、考えてみてほしい。動詞もまた目的語の前に置かれる「前置」詞なのである。別の言い方をすれば、前置詞とは、主に動詞の現在分詞形から派生して、意味的には空間的イメージ認知に特化し、用法としては前置詞用法のみに特化した、「特殊」動詞のことである。

前置詞の成立過程をみても動詞から進化してきたものが非常に多い。たとえば、between, across, during, past などには be 動詞や cross, dure, pass といった動詞のなごりがいまでも感じられる。また、concerning, regarding, excepting, including など、現在では文法範疇として現在分詞ではなく前置詞としてすでに認知されてはいるものの、現在分詞としてのニュアンスがまだかなり残されている。

したがって私たちが英語を読んだり書いたりするときには、前置詞を「特殊」動詞として認識しなければならない。たとえば、前置詞には動詞と同様に他動詞方法と自動詞用法がある（The book is on the desk. / The switch is on.）。また前置詞句は分詞句と同じものとして理解すべきである。どちらも SVO 節の Subject が省かれた表現である。

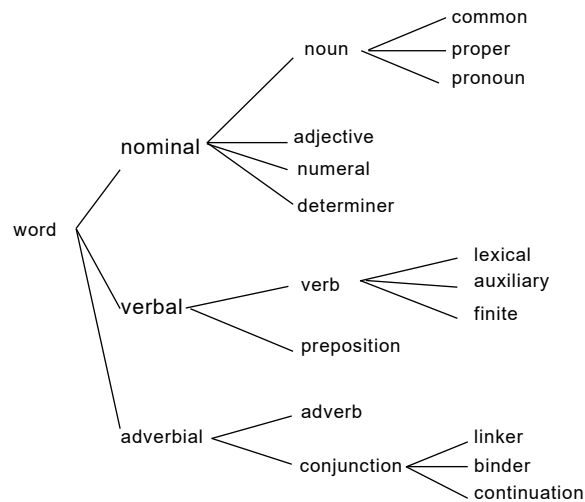
☆☆☆

<コラム>

機能文法での前置詞の位置づけ

従来の文法理論を堅く信じる人々のなかには、前置詞が「特殊」動詞であるといった「心と言葉のグローバル英語文法」の主張には根拠がなく荒唐無稽であるとみなす人もいるかも知れない。あるいは、従来学んできた文法からはあまりにもかけ離れているために、どうも信じきれないと思っている人もいことだろう。

そこで、そうした反発や疑いを払拭するために、従来の文法理論のなかにも、前置詞を動詞のグループとしているものがあることを紹介しておく。以下の図は、M.A.K. Halliday 他の著書、*An Introduction to Functional Grammar* からの抜粋である。なお Halliday は機能文法の創始者として著名な英国出身の英文法学者である。



An Introduction to Functional Grammar, Third Edition, M.A.K. Halliady et. al., Arnold, p.52

この図では、verb と preposition が、verbal という機能分類の下位概念としてまとめられている。これは、動詞と前置詞が動詞性という同じ機能を持っていることを示している。

このように、従来の学問的な文法体系のなかでも前置詞を動詞とグループ化しているものが存在する。したがって、数ある文法体系のひとつにすぎない学校英文法の体系に思考を縛られることは無意味であるばかりでなく有害でもある。

☆☆☆

前置詞と助詞とは一対一対応ではない

従来の日本の英語教育では、英語の前置詞と日本語の助詞（プラス他の表現）とを、ほぼ一対一で対応させてきた。たとえば、of=「の」、from=「から」、at=「で」、to=「に、へ」、in=「(中)に」、under=「(下)に」というようなかたちである。そして、そのことに対して英語関係者の誰もが疑問に思わずにいた。そして

A of B ⇔ B の A（A を名詞とする）

A from B ⇔ B から A

A at B ⇔ B での A

A to B ⇔ B への A

A in B ⇔ A のなかの B

A under B ⇔ B の下の A

といったかたちの英文和訳/和文英訳的な処理をして、英語の授業をおこなってきたのである。

しかし、この教え方は、これまでの英語教育の稚拙さを象徴する致命的な間違いであった。そもそも、A of B と B の A とでは、A と B の順番が逆になっているのであるから、情報構造面からみれば両者が対応していないのは明らかである。それに対応していると判断してきたのは、これまでの翻訳と英語教育が命題の対応のみに焦点を当てて、その他の要素については無視をしてきたからである。

日本語の動詞には前置詞を対応させることが可能

上に述べたように、前置詞とは動詞の一種であるから、もし日本語で前置詞に近いものがあるとすれば、それは「助詞」ではない。「動詞」（を含む用言）のほうである²。

したがって、もし無理に A of B に定型的な日本語をあてはめるとすれば、「B の A」ではなく「A は B に属する」のほうが、まだましであろう。同様に、A from B であれば「B から A」ではなく「A は B から始まる」、A at B なら「B の A」ではなく「A は B にある」、A to B なら「B に A」ではなく「A は B に向かう」、A in B は「B のなかの A」ではなく「A は B のなかである」、A under B は「B の下の A」ではなく「A は B の下である」とするほうが、まだましである。

また、前置詞は動詞の一種であるから、他動性だけではなく、自動性も持っている（他動性/自動性については動詞の項を参照）。したがって、A is in. であれば「A は中だ」、A is out. ならば「A は外だ」という英日での対応が可能である。

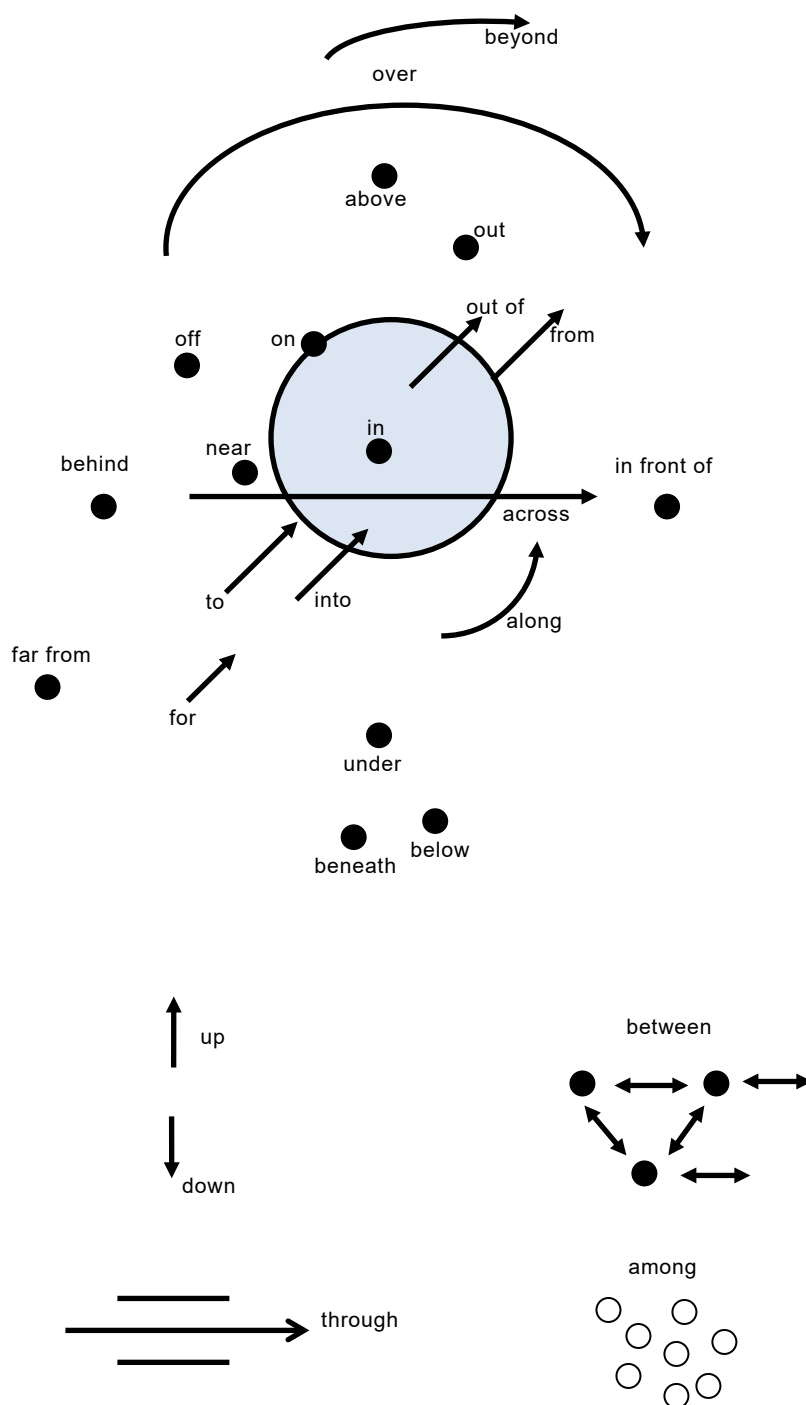
もちろん、このように英語の前置詞と日本語の動詞との一対一対応を考えることは、「心と言葉の翻訳」モデルの観点からみると、本当の翻訳と呼べるほどのものではない。だが、それが英文和訳/和文英訳の「呪い」を解くために機能するのであれば、それはそれで重要なことであろう。

前置詞の空間的認知図

近年の認知言語学の発展に伴って、前置詞を空間的な認知を通じて理解する手法が普及している。これは前置詞という動詞を理解するためにとってもよい方法である。次ページに私（成瀬）がまとめた前置詞の空間的認知の一覧図を紹介しておく。

² ただし、両者のあいだには語順が違うという決定的な差異があることを、決して忘れてはならない。日本語の動詞は、英語の概念にあわせる「前置詞」ではなく「後置詞」である。

前置詞の空間的認知



「of」の特殊性

この図のなかに、「of」が含まれていないことに注意していただきたい。なぜなら、前置詞のなかでも of は特殊であるからだ。他の前置詞が、動詞でいえば SVO 構文をつくる一般動詞的な役割を果たすのに対し

て、of は敢えていえば be 動詞（コピー）の役割を果たすものである。そのために、of は空間的な認知には向いていない。

歴史的にみると、of はもともとはインドヨーロッパ祖語の「-apo」に由来する表現である。この-apo は「離れる」という意味を持っていた。したがって古英語の時代（5～11 世紀）の「of」は「分離・起源」（A of B = B から A が離れる、B が A の起源である）という意味でおもに用いられていた。つまり現在の off のイメージである。しかし時代がすぎていくと、of には「所有」のイメージ（A of B = B が A を有する）が強く感じられるようになった。そのため、「off」という新しい表現が 14～16 世紀に「分離・起源」の意味として of から派生的に生まれ、それが 17 世紀ごろに定着したのである。だが、このように off が派生的に生まれた後でも、of のなかにはいわば遺伝子としての「分離・起源」のイメージが残されている。

ここからわかることは、A of B における A と B とはもともと同じものであるということだ。したがって、多くのその他の前置詞が持っている A と B との二項対立的な認知イメージは、of には存在しない。それが、この後のコラムで紹介する made of や talk of といった用法の原点になっている。

☆☆☆

<コラム>

made of と made from

中学か高校の英語の授業において made of と made from の違いについて The desk is made of wood. と Wine is made from grapes. といった例文を示されたうえで、

「木と机のように何でできているか見た目でわかるもの（材料）の場合には of を使い、ブドウからワインのように形が変わり何からつくられているか見た目でわからないもの（原料）の場合には from を使う」

といった説明を受けたことのあるのではないだろうか。

さらには、

「たとえば、The desk is made of wood. は「その机は、木“で”つくられている」と訳して、The desk is made of wood. については「ワインは、ブドウ“から”つくられている」と訳し分けばよい」

といった説明を受けた人もいるかもしれない。

前者の made of と made from の違いの説明は本質をついていない。後者の「木でできている」と「ブドウからつくられている」の訳し訳しについては、まったくのでたらめである。以下、ひとつずつ説明しよう。

まず、made of と made from の違いである。本文で述べたように、of には「由来、分離」という基本イメージがあり、そのため A of B という表現には A と B とが元来は同一の実体/事象であるとの認識が含まれている。それに対して A from B では A と B とが別の実体/事象であると認識されている。これは英語の世界認識の基本である二項関係性の認識である。すなわち両者は本質的に異なるのである。

このようにして of の持っている本質的な認識イメージを理解できれば、made of と made from だけではなく、talk of と talk about、think of と think about、die of と die by/with といった、その他の表現においても、of とその他の前置詞とのイメージの本質的な違いが理解できるようになるはずである。

つぎに、The desk is made of wood. = 「その机は、木でつくられている」、The desk is made of wood. = 「ワインは、ブドウからつくられている」という訳し分けについてである。

これがまったくのたらめである根源的な理由は、ここでは of という preposition（前置詞）と「で」「から」という助詞とが一对多として対応させられていることにある。だが英語の preposition（前置詞）と日本語の助詞とは一対一や一对多で対応するものではない。そもそも本質的に英語と日本語の「品詞」自体が一対一で対応するものではないのである。そしてほとんどの英語教師がこの点についてまったく理解ができていないために、made of の of には「で」を当てて made from の from には「から」を当てるといった荒唐無稽な解説をする羽目になる。

インターネットではこうしたたらめな説明がいまも蔓延している。学校現場でも同様の事態が現在でも見られるに違いない。ここを変えなければ日本の英語教育ひいては翻訳に未来はない。なんとかしなければならない。

☆☆☆

接続詞

接続詞（conjunction）は、センテンス要素の関係性を示す言語表現である。具体的な関係性としては、順接、逆接、並列、付加、説明、選択、転換などが挙げられる。

代名詞

代名詞（pronoun）は、名詞・名詞句の代わりに用いられる語のことである。「代名詞」は、英語ではそれなりに意味のある概念であるが、日本語では意味のある概念ではない。日本語の「彼」「彼女」は、代名詞でなく、単なる名詞である。「それ」「あれ」は、単なる指示詞である。この点に関する詳細については、「心と言葉のグローバル日本語文法」を参照いただきたい。

2. 句

「句」（phrase）とは、特定の働きをする語の集合体（word group）のうち、内部に主部・述部の構造を持たない集合体のことをいう。

句は、「機能」と「形態」という2つの観点から分類することができる。

「機能」による句の分類

句を構文機能という観点から分類すると、主部句（Subjective Phrase）、述部句（Predicative

Phrase)、修飾部句(Modified Phrase)の3つに分かれる。

このうち、述部句は、下位分類として、目的語句(Object Phrase)と補語句(Complement Phrase)の2つに分かれる。

修飾部句は、下位分類として、形容詞的修飾部句 (Adjectival Phrase) と副詞的修飾部句 (Adverbial Phrase) の2つに分かれる。

以上をまとめると、以下になる。

I.「機能」による分類：

- A.主部句 (Subjective Phrase)
- B.述部句 (Predicative Phrase)
 - a.目的語句 (Object Phrase)
 - b.補語句 (Complement Phrase)
- C.修飾部句 (Modified Phrase)
 - a.形容詞的修飾語句 (Adjectival Phrase)
 - b.副詞的修飾語句 (Adverbial Phrase)

「形態」による句の分類

いっぽう、句を「形態 (かたち)」から分類すると、名詞句(Noun Phrase)、前置詞句 (Prepositional Phrase)、分詞句 (Particle Phrase) の3つに分かれる。

分詞句は、下位分類として、現在分詞句 (Present Particle Phrase)、過去分詞句 (Past Particle Phrase)、不定詞句 (Infinitive Phrase) の3つに分かれる。

以上をまとめると、以下になる。

II.「形態」による分類：

- 1.名詞句 (Noun Phrase)
- 2.前置詞句 (Prepositional Phrase)
- 3.分詞句 (Particle Phrase)
 - a.現在分詞句 (Present Particle Phrase)
 - b.過去分詞句 (Past Particle Phrase)
 - c.不定詞句 (Infinitive Phrase)

「機能」と「形態」を混同しない

句を考える際に最も気をつけなければならないのは、上に述べた「機能」による分類と「形態」による分類を、決して混同しないことである。この2つの分類は、まったく別の概念である。

まったく別の概念であるのだから、2つの分類を同時に使うこともできる。たとえば、「前置詞句の形容詞的修飾部句」「分詞句の主部句」といった具合である。具体例を挙げてみよう。

After school is the busiest time.

上のセンテンスの after school は、機能としては主部句であるが、形態としては前置詞句である。次の例である。

The best choice is visiting after school.

上のセンテンスの visiting after school は、機能としては述部句である、形態としては現在分詞句である。つぎに、少し複雑な例を挙げる。

The cat came from behind the curtain.

上のセンテンスの from behind the curtain は、機能としては副詞的修飾部句であり、形態としては前置詞句であり、そのなかの behind the curtain は、機能としては from に対する目的語句であり、機能としては前置詞句である。うーん、ややこしい。

英文読解での混乱を避けるためには、形態としての分類ではなく、機能としての分類だけに気持ちを集中することが大切である。かたちよりも、働き。これが基本である。

3. 節

特定の働きを受け持つ語群のうち、内部に主部・述部の構造を持っているものを「節」(clause) という。

節が兄貴分、句が弟分

「節」の説明については、「句」で行った説明と同じである。なぜなら、そもそも「句」と「節」とは、本誌的には、同じものだからである。

ようするに「句」とは、節のなかの主部・述部の一部が省略されたものにすぎない。すなわち、「節」が兄貴分であり、「句」が弟分である。以下、例を挙げておく。

She went to Ginza so that she shopped for a new dress.

↓

She went to Ginza to shop for a new dress.

When he walked along a mountain path, he came across a bear.

↓

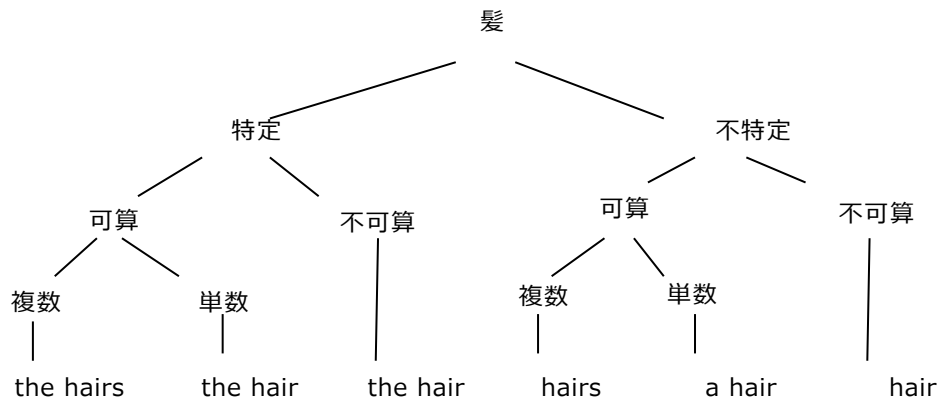
Walking along a mountain path, he came across a bear.

では、なぜ「節」と「句」という2つの表現方法があるのかといえ、これは文体の問題に大きく関係する。この点に関する詳しいことについては、「10章 文体」の「2. 構文要素」のところで取り上げることにする。

2 章 名詞認識

【要約】

- a や the の使い方、単数や複数の使い分けを考える際に最も大切なことは、太陽や月に the をつける、最上級に the をつけるといった用法を丸覚えするのではなく、冠詞や単数複数を使って英語ネイティブがどのように世界を認識しているのかを、まずしっかりと理解することである。それがわからなければ、いくら用法を覚えても、うまく使いこなせない。
- 日本語と英語では、「もの」（名詞）に対する認識方法が本質的に異なる。日本語での名詞認識は、単層構造である。いっぽう英語の名詞認識は、「特定/不特定、可算/不可算、単数/複数」の三層構造である。図にすると次のとおりである。



- 英語という言語では、名詞を必ず三層構造で認識して表現しなければならない。これは英語としての義務的条件であり、英語の名詞は、この3つの認識経路を通さずに表現することはできない。
- 英語の名詞には、「純粋不可算名詞」「純粋可算名詞」と呼ばれるものがある名詞中心の世界観を持つ英語では、動詞中心の世界観を持つ日本語に比べると、数量についてはるかに厳密な区別をおこなう。all/every/each の認識、some/several/a few の認識、no の認識、a xxx of の認識などは特に重要である。

☆☆☆

1. 英語の名詞認識の三層構造

日本人が英語を書くとき、もっとも頭を悩ませるのが、冠詞や単数・複数の使い分けではないだろうか。どんな場合に a や the をつければよいのか、どんなときが単数でどんなときが複数かといったことが、私たちにはよくわからない。

そこで、ネイティブにたずねてみるのだが、この場合はこうで、あの場合はああだといったような、対症療法的な答えしか返ってこないのが普通である。

これは仕方がない。母語は無意識に用いられるものであり、それを理屈で説明するのは難しいのである。結局のところ、英語の a や the の使い方、単数や複数の使い分けについては、自分自身で習得していくしかほかに方法がない。

用法ではなく認識を理解する

a や the の使い方、単数や複数の使い分けを考える際に最も大切なことは、太陽や月に the をつける、最上級に the をつけるといった用法を丸覚えするのではなく、冠詞や単数複数を使って英語ネイティブがどのように世界を認識しているのかを、まずしっかりと理解することである。それがわからなければ、いくら用法を覚えても、うまく使いこなせない。

では、英語ネイティブたちは、この世界の「もの」（名詞）をどのように認識しているのだろうか。

日本語の名詞認識は単層

まず知っておかなければならないのは、日本語と英語では、「もの」（名詞）に対する認識方法が本質的に異なるということである。

日本語での名詞認識は、単層構造である。日本人は、すべての「もの」を同一カテゴリーで認識している。これは日本人にとっては当たり前のことであるが、世界の言語をみると、単層的な名詞認識が必ずしも多数派とはいえない。たとえば、インドヨーロッパ語族³の名詞は、単数・複数・（双数）、男性・女性・（中性）、抽象・具象といった、多層の認識構造をもっている⁴。

特定/不特定、可算/不可算、単数/複数

英語の名詞認識は、三層構造をしている。「特定/不特定、可算/不可算、単数/複数」の三層である。

英語では、この三層構造を通すことなく、書き手/話し手が名詞を表現することはできない。読み手/聞き手が英語を理解する際にも、必ずこの三層認識を認識しながら理解をしている。

したがって、日本人が書いた英語であっても、それが英語であるかぎり、名詞については、この 3 つの認識が必ずそこに表現されているのである。

第一認識：「特定/不特定」

英語の名詞における第一の認識は、「特定/不特定」である。「特定/不特定」とは、言葉の送り手（話し手/書き手）からみて、その名詞を特定できるものとして認識しているか、特定できないものとして認識しているか、という区分である。

特定できると認識した場合には、the で表現する。この the を取って日本語に訳すとすれば、「あの例の…」といったところだろうか。特定できないものと認識した場合には、the は用いない。

たとえば、ここに I like reading the book. というセンテンスがあるでしょう。

³ 欧州圏言語、アラビア語、一部北アフリカ諸語、サンスクリット語など。

⁴ 対してアジアやアメリカでのほとんどの言語にはそうした多層的な名詞認識構造は発達しなかった。

I like reading the book.

the book とあるからには、書き手は「あの例の」本をすでに知っており、特定できると認識している。

ただしこれだけでは、読み手のほうが「あの例の」本を特定できるかどうかは、わからない。もし文脈のなかで「あの例の」本についてすでに述べられているのであれば、読み手にもその本のことが特定できるので、問題はない。しかし、ただ唐突に出てきたのだとすると、突然「あの例の本」といわれるわけであるから、読み手としては困惑するのみである⁵。

以上からわかることは、I like reading the book.での the の使い方が「正しい」「正しくない」といった議論には、意味がないということである。重要なことは、書き手が the に伴う特定/不特定の感覚を正しく認識したうえで、このセンテンスを書いているかどうかにある。

第二認識：「可算/不可算」

第二の認識は、「可算/不可算」という区分である。つまり、数えられるか数えられないか、ということだ。

たとえば、「私には白髪がある」という内容を英語で表現したいとする。その際に、I have white hair.とするのは間違いである。

I have white hair.

×「私には白髪がある」

なぜなら、hair という語を何もつけないで裸のままで用いると、頭髮全体を示す表現つまり「髪というものの」の意味になるからである。これでは、あなたは総白髪だということになってしまう。実際、white hair でグーグルの画像検索をしてみると、ほとんどの画像が真っ白な頭髮の人々の画像である。白髪交じりの頭髮の画像は見当たらない。

総白髪ではなく少し白髪交じりであるということを言いたいのであれば、hair を可算名詞として用いなければならない。hair を数えられるものとして用いる場合には、何もつげずに丸裸のままで用いるのではなく、a hair, hairs, a few hairs などのかたちにする。実際の英語センテンスとしては、たとえば、I have a few white hairs.などがふさわしいだろう。

I have a few white hairs.

「私には白髪がある。」

第三認識：「単数・複数」

「特定/不特定」「可算/不可算」という順番に名詞の認識判断を行ったのち、書き手が、その名詞を「可算」だと認識している場合には、第三の認識判断として、「単数・複数」の区別をする。「不可算」と認識している場合には、単複の区別はしない。というよりも、区別ができない。

単数/複数の区別は、ほとんどの人にとっておなじみのものだろうが、用法から考えてしまうと実際の区別に

5 深読みをするならば、この the book はたとえば聖書の暗喩という解釈もできないことはない。

おいて迷うことが多いものである。しかし、用法の観点からではなく認識の観点から考えれば、書き手がひとつと認識しているときには a をつけて、2 つ以上だと認識しているときには複数形にすればよいだけの話である。ナーバスになる必要はない。

たとえば、上の白髪の場合は、もし白髪が一本だけなら a hair、複数あるのなら white hairs または a few white hairs、もっともっと数多くあるのなら many white hairs にすればよいのである。

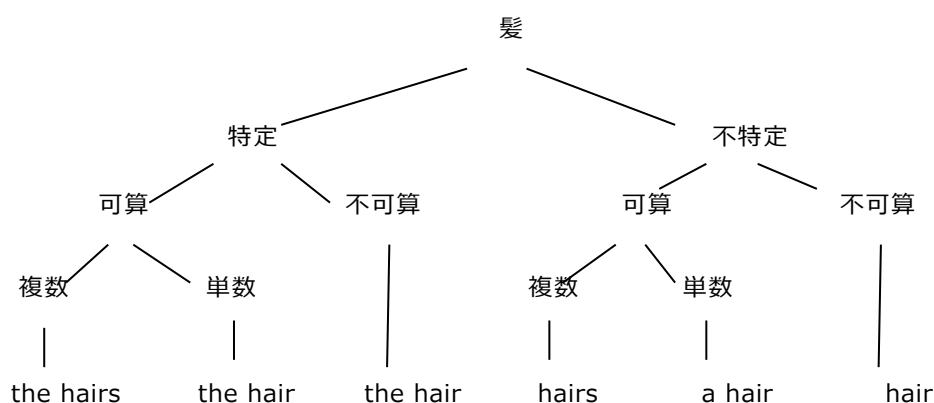
I have white hairs.

I have some white hairs.

I have many white hairs.

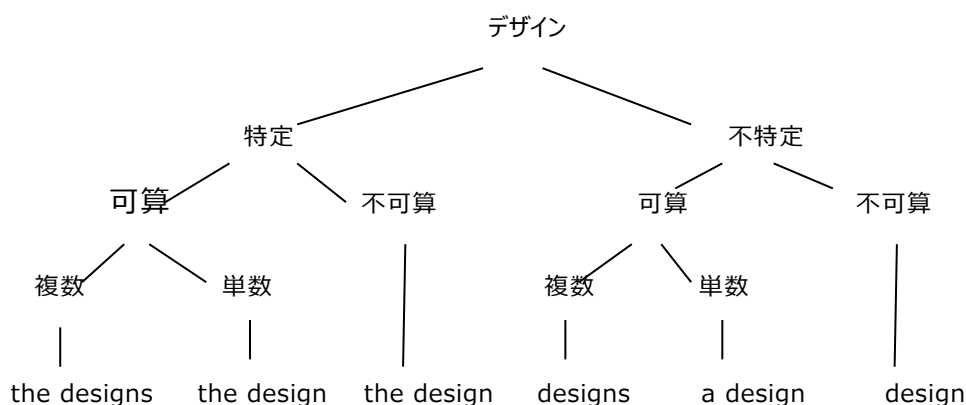
英語の名詞認識の三層逆ツリー図

ここまでの話を図にまとめると以下のような英語の名詞認識の三層逆ツリー図ができる。



単層である日本語の認識構造では「髪」という一語であるが、三層である英語の認識構造を通すと、the hairs, the hair, hairs, a hair, hair という 5 つのかたちに分化する⁶。

別の例として、「デザイン」を挙げておく。



6 なお「特定」「可算」「単数」と「特定」「不可算」のかたちが同一になっているのは、英語が「特定」「可算」「単数」に対して the a hair というかたちを許容しないからである。

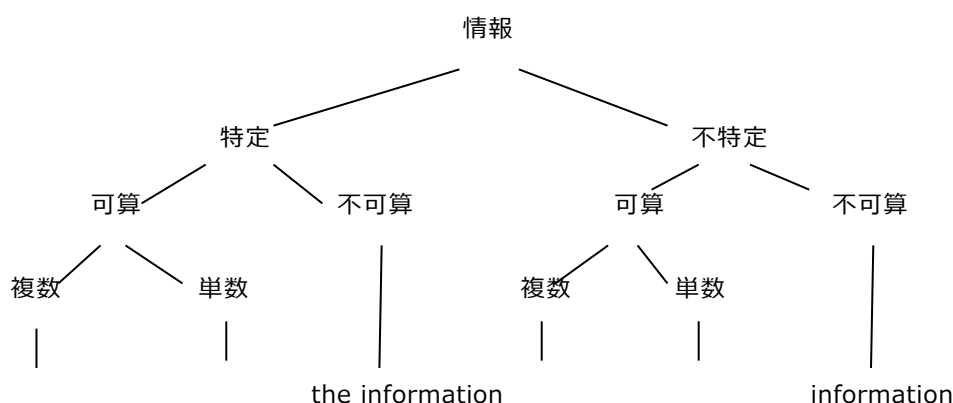
「特定」「可算」「複数」の the designs は、書き手/話し手および読み手/書き手がすでに知っている具体的な複数の設計図や図案、つまり「あの例のいくつかの設計図や図案」を示す。

「不特定」「不可算」の design は、「そもそもデザインというもの」という抽象的な概念である。日本語の「デザイン」という語は抽象的イメージである場合がほとんどであるが、英語の design は具体的な設計図や図案を指す場合がよくある。

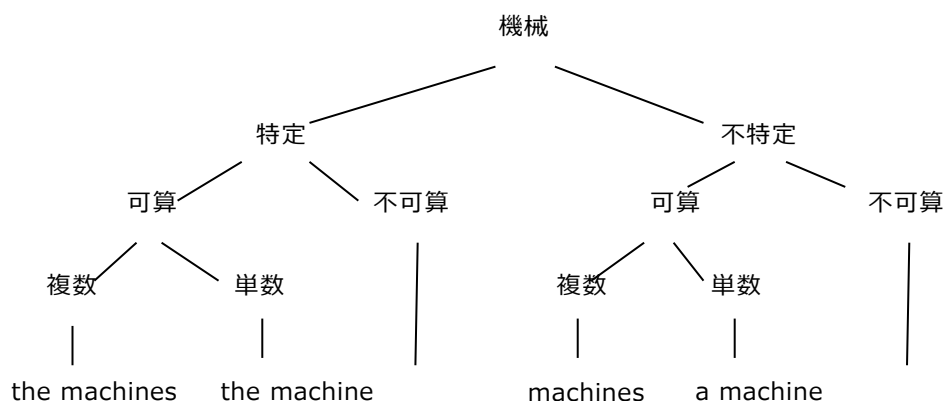
「純粋不可算名詞」「純粋可算名詞」

英語の名詞には、「純粋不可算名詞」「純粋可算名詞」と呼ばれるものがある。純粋不可算名詞で有名なものとしては、information, equipment, knowledge, furniture, evidence, advice などが挙げられる。

これらの語には、可算のかたちがない。したがって、かたちとしては information と the information の 2 つだけである。



「純粋可算名詞」の例としては、tube, cup, machine などが挙げられる。これらの語には不可算のかたちがない。



このように純粋不可算名詞、純粋可算名詞という例外はあるにしても、英語名詞のほとんどは 5 つのかたちを持っている。

まず本質を知る

従来の英語教育では、「英語の名詞には the をつけたり a をつけたりする」「可算名詞と不可算名詞がある」「単数と複数の区別がある」などといった説明がなされてきた。しかし、そうした説明だけでは、英語の名詞を実際にうまく使うことができない。英語の名詞の本質をわかっていないからである。

英語を学ぶ際に、なによりも大切なことは、英語における名詞認識の本質とはどのようなものなのか、それが日本語における名詞認識とどのように具体的に違うのかを、まずしっかりと理解することである。具体的な用法を覚えるのは、そのあとのことでよい。

2. 英語の数量認識

上でみたように、英語という言葉では、名詞を必ず三層構造で認識して表現しなければならない。これは英語としての義務的条件であり、英語の名詞は、この 3 つの認識経路を通さずに表現することはできない。

英語の名詞認識には、そうした必須条件としての認識のほかに、任意すなわちオプショナルな認識条件がある。その代表的なものが、数量の認識である。

名詞中心の世界観を持つ英語では、動詞中心の世界観を持つ日本語に比べると、数量についてははるかに厳密な区別をおこなう。我々が英語で何かを表現する際には、そうした英語の厳密な数量認識も適切に表現しなければならない。

以下、数量認識を表す英語表現について具体的に説明する。

all, every, each

英語では、名詞を集団として認識するときに、特に厳密な認識の区別をおこなう。そして、それぞれの認識に合わせて、別のかたちで表現する。その代表的なもののひとつが、all, every, each の使い分けである。

たとえば、ここに複数のリンゴがあるとしよう。そのリンゴ集団について、ひとつひとつのリンゴを強く意識せずに集団として認識しているときには all が用いられる。all apples である。

さらに全体意識が強くなって、ひとつひとつへのリンゴの意識が消えて全体でひとつと認識していると、all のあとが単数になる。all apple である。

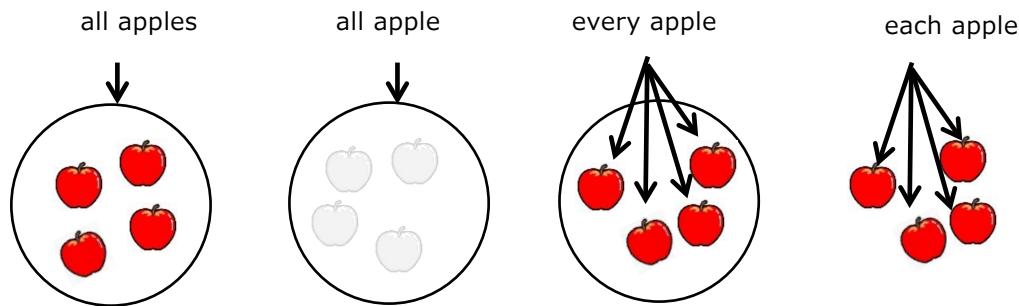
それに対して、リンゴ集団のなかのリンゴひとつひとつを強く意識しながら認識しているときには every が用いられる。every apple である。ひとつひとつを強く認識しているので複数形にはならない。

そのリンゴたちを集団としては意識せず、ひとつひとつのリンゴに注目しているときには each を用いる。each apple である。ひとつひとつを強く認識しているので、このときも単数形である。

以上のことをまとめると、次のようになる。

- all apples = ひとつひとつの apple を強く意識せずに、集団として認識する。
- all apple = ひとつひとつへのリンゴの意識が消えて、全体でひとつと認識している。
- every apple = リンゴ集団のなかのリンゴひとつひとつを強く意識しながら認識している。
- each apple = リンゴを集団として意識せず、ひとつひとつの apple に個別に注目している。

図にすると、以下のイメージである。



日本語の認識では、こうした名詞の数量感覚がないために、all apples、all apple、every apple の訳語は、どれも「すべてのリンゴ」になってしまう。しかし英語で表現する際には、こうした認識別の使い分けが、その表現の価値を大きく左右する。

some, several, a few

some

some が持っている本質的なイメージは、認識対象としているモノ（名詞）の「アイマイ感」「ボンヤリ感」である。

some を使うということは、その話し手/書き手が、いま話題としているモノの数量が明確にわかっていないことを示している。英文和訳では some を「いくらかの」「多少の」などと訳することが多いのだが、この訳語は some の本質的イメージの表現とかなり離れている。

たとえば、冷蔵庫のなかにリンゴがあることはわかってはいても、それがどのぐらいの数があるのかわからないとしよう。そのときの数量認識を表現するには、次のようにする。

There are some apples in the refrigerator.

some は不可算名詞の場合でもアイマイ感、ボンヤリ感を示すことができる。たとえば、冷蔵庫のなかにあるものが apple ではなく meat（meat だけなら不可算認識）であり、それがどのぐらいの量があるのかわからないときには、次のように表現する。

There is some meat in the refrigerator.

several

several も数的な認識であるが、some の持つアイマイ感、ボンヤリ感を持っていない。一般的には 3、4 個程度の具体的な数を認識するものである。

たとえば、冷蔵庫のなかに apple が確かに数個（具体的には 3～8 個ぐらい）あると認識して場合には、次のように表現する。

There are several apples in the refrigerator.

several は明確な数的な認識なので、当然ながら不可算認識の表現には使えない。

× There are several waters in the refrigerator.

このような場合には、たとえば bottle という可算的な表現を用いて several bottles of water というかたちにする。

○ There are several bottles of water in the refrigerator.

a few

a few も several と同様に明確な数的な認識であるが、それに加えて、そこには「少ない」という別の認識が含まれている。例をみてみよう。

1. There are several apples in the refrigerator.
2. There are a few apples in the refrigerator.
3. There are few apples in the refrigerator.

上の例文の 1 と 2 とでは、実際に冷蔵庫にあるリンゴの数は同じかもしれない。しかし、a few を使った例文 2 では、それが少数にすぎないという認識が付加されている。そのため、例文 3 のように、a few から a が落ちて few だけになると、少数にすぎないという認識はさらに高まり、ほぼ存在しないというレベルにまで達する。

no

no は、対象とするモノ（名詞）が存在しないこと、すなわち、「存在の否定」を意味する数量認識である。

no の認識は、日本人にとって数量認識のなかで最も捉えづらいものである。日本語のなかには、英語の no のような名詞の存在否定を示す言語表現が存在しないからである⁷。

⁷ 日本語の否定表現である「～ない」は動詞に対する存在否定だけを表現する。日本語に名詞の存在を否定する認識がないのは、日本語がコト（動詞）中心の言語であることを反映したものと考えられ、英語は名詞中心の言語であるために no のような名詞の存在否定認識が発達したものである。

a ○○○ of…

英語の名詞認識には、三層認識、基本的数量認識のほかに、応用的な数量認識が存在する。それが、a ○○○ of…のかたちである。その一部の具体例を、以下に挙げておく。

a lot of, a little of, a few of, a piece of, a pair of, a group of, a bunch of, a series of, a pile of, a lump of, a heap of, a loaf of, a set of, a stretch of, a number of, a bit of, a wide range of, a great deal of…

some や all や every が数量認識の基本語彙だとすると、a ○○○ of のかたちは応用語彙にあたるものである。種類はきわめて多種多様であり、数的なものもあれば量的なものもあり、二次元的なものもあれば三次元的なものもある。

これらの表現は、その後続く名詞の数量的な認識をこまかく規定するものであるが、some や all などと異なって、それぞれの適用可能な範囲がかなり限定されている。

たとえば、a loaf of とくればパン（あるいは肉）に使われる数量表現であるが、loaf は塊のことだからといっても、A loaf of clay（粘土の塊）とはいわない。粘土の塊は a lump of clay という。こうした点にも、名詞認識に細かくこだわる英語の世界認識の特質が現れている。